様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：５３７０１
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０５４０４

研究課題名（和文）米国における世界史教育理論の分析と評価による世界史教育改革モデルの構築

研究課題名（英文）Building of the world history education reform model by analyzing and assessing of the world history educational theory in the United States

研究代表者
空　健太（Sora, Kenta）

岐阜工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：３０５４８２８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本の世界史教育のオルタナティブとなりうる世界史教育のモデルを提示することを目的に，アメリカを対象にして，世界史教育の理論や実践の収集・調査を行いその教育内容の分析を行うものである．本研究では、世界史教育研究の到達点を整理し、３つの世界史教育のモデルを明らかにした。３つのモデルとは、歴史リテラシーのための世界史教育、グローバルな認識のための世界史教育、民主主義社会の市民育成のための世界史教育である。これらのモデルは、世界史教育の目標、内容、方法の改革を行なったものであり、我が国の世界史教育に対する改革モデルとして評価できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to present some models of world history education for Japanese world history education's alternative. I gathered and investigated theories and practices of world history education of the US and analyzed them. In this research, I reviewed world history education research in Japan and the US and clarified the three world history education models. The three models are "world history education for historical literacy", "world history education for global understanding", "world history education for fostering citizens of democratic society". These models have reformed the goals, contents and methods of world history education. So They can be evaluated as a reform model for world history education in Japan.

研究分野：社会科教育学

キーワード：世界史教育　アメリカ合衆国　意図されたカリキュラム　歴史リテラシーの育成　グローバルな認識の育成　民主主義社会の市民の育成

１．研究開始当初の背景

我が国の世界史教育は、実質的に学ぶ意味のある科目であるという位置を占めることができていない。そこには３つの原因があると考えられる。１つ目は、教授方法の問題。時間的制約のある中で世界という広さと歴史という深さの両方を保障しなければならず、各国史の概説になったり、教師の解釈を伝達するだけの教授が行われやすい。２つ目に、学習内容の問題。西洋中心主義を克服したグローバルな世界史のための学習はどのような原理で選択されるべきか。３つ目に、教育目的の問題。自国史と世界史は対象が異なるのみであり、なぜ世界史として世界史を学ばなければならないのかという点を学習者が見出すことができないものとなっている。以上のような点が原因となり、我が国の世界史教育は制度的な重視に基づく、形式的なものに留まってきた。

２．研究の目的

米国では資質の育成を重視した多様な世界史教育論が展開・実践されている。制度的にも、社会科の枠内で、自国史と世界史を別の科目として実施しており我が国の歴史教育の制度との類似性もある。近年の米国の教育実践を例に、どのような世界史教育があるのかを明らかにする。具体的には、次の３点を研究課題とする。

(1)米国で提案あるいは実施されている世界史教育には多様なパターンが存在するが、それらはどのような世界史教育を提示しているのか。

(2)それぞれの世界史教育は、どのような特質・意義・課題を有しているのか。

(3)どのように日本の世界史教育の改革に貢献することができるか。

３．研究の方法

本研究では、日本と米国における世界史教育の研究の展開を考察し、特に米国を事例に、世界史教育の理論や実践についての資料収集や授業観察、プロジェクトの開発者へのインタビューなどを通してその狙いを明らかにすることを通して、本研究の目的である世界史教育のモデルを明らかにすることを目指した。

４．研究成果

本研究の成果は、次の３点に整理することができる。

(1) 世界史教育の研究の現状と課題

教科教育学の目的を「理論と実践の両方を往還し、実践や提案に対して改善・改革を果たすこと」と捉え、世界史教育の教育の研究が、どのように実践の改善へと発展・深化してきたかを先行研究を整理すると、①歴史研究（成立史）としての世界史教育研究、②理論研究としての世界史教育研究、③教育内容（開発・分析）研究としての世界史教育研究、④教授・学習の改善研究としての世界史教育研究として整理できる。

近年の世界史学の発展を踏まえた米国における世界史教育研究は「世界史に関する議論は、選択された内容を教室でどのように進行するべきかという問題ではなく、どのような内容を提示すべきかという問題によって支配される傾向がある」という指摘を踏まえて、④の世界史の教授や学習を改善するためにはどうすればよいかという実証的な研究が中心となっている。世界史の教授・学習の改善研究は、実践現場への接近、世界史の特殊性への注目、研究の多様化という３点の特徴がある。我が国の世界史教育に関する研究も、このような教授・学習の改善研究へと発展すべきであるが、より意味のある改善研究を行うにあたっては、どのような世界史教育がありうるのかを考察する必要がある。

(2) 世界史教育の改革モデル

本研究の調査から、世界史教育の分類が、内容に焦点を当てたものであることから、何のために行われる世界史教育かという視点つまり目標に焦点を当て、米国で実施・提案されている教育実践を事例に次の３つの世界史教育のモデルを帰納的に整理することができた。

① 歴史リテラシー育成のための世界史教育

Reading Like a Historian（歴史家のように読む）（以下，RLH と略記）は，歴史教育学者ワインバーグ（Wineburg, S.）を中心にスタンフォード大学歴史教育グループ（Stanford History Education Group）（以下，SHEG と略記）によって開発されたカリキュラムである。既に複数の先行研究によってそのカリキュラムの内容から実際の授業の実態までの分析が行われており，優れたカリキュラムとしての一定の評価を受けている。ただし，先行研究では RLH の世界史の特質は明らかにされていない。SHEG の WEB サイトには，自国史である合衆国史と世界史の両方が掲載されており，計画レベルのカリキュラムが提示されている。そこで、提示された自国史と世界史の学習の比較考察を行った。

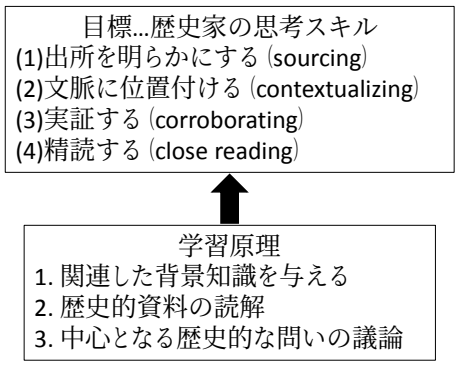

図１　RLH の学習

分析の結果として、このモデルの世界史教育は、歴史教育としての世界史と呼ぶべきものである。RLH の世界史は，図１のような歴史家の思考スキルを歴史的思考力として獲得していくための目標や一次資料や二次資料の分析を方法とするものであり、歴史リテラシー育成のための世界史とラベリングすることができる。

RLH が提起する４つの歴史的思考の技能は，世界史を事例としなくとも達成可能である。むしろ自国史ではないために，導入の講義で設定する知識獲得のプロセスが多く必要となり，技能獲得にとってネガティブな要因となっている。RLH の場合、自国史と世界史の区分は形式的なものにすぎないのである。目標から明確に学習方法が導かれる優れたカリキュラムであるが，世界史については（資料の存在など）限定された歴史的事例しか扱うことができず，なぜ世界史を扱うのかという問いに明確に回答することはできないという課題が指摘できる。

② グローバルな世界史認識を育成する世界史教育

さらに、Reading Like a Historian（RLH）プロジェクトとダン（Dunn，R. E.）が中心として開発した World History for Us All（以下、WHFUA と略記）プロジェクトを比較した。これらはいずれも学問の構造を重視した真正な歴史教育としての特徴を持つ歴史学習のプロジェクトであるが、前者は歴史研究に基づく世界史であり、後者は世界史研究に基づく世界史であると考察した（図２）。つまり、WHFUA は世界史の特殊性に注目し、グローバルな世界史認識を育成しようとするカリキュラムである。

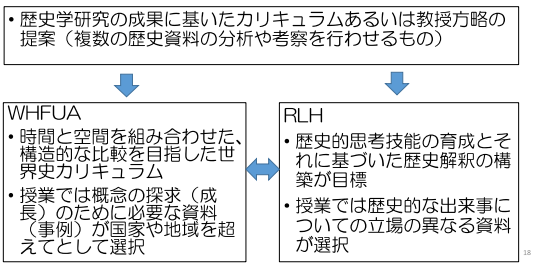

図２　RLH と WHFUA の比較

また、アドバンスド・プレイスメント（Advanced Placement）の世界史コース（AP 世界史）も、同様に世界史教育の特殊性に注目し、グローバルな認識を獲得させようとするカリキュラムである。近年の米国の世界史教育研究は、こうした世界史の特殊性を踏まえた学問性の高いカリキュラムや授業が評価されているようである。代表的な主張者として、上述したダンの他、ハリス（Harris，L. M）などがいることも明らかにした。例えばハリスは、世界史研究者の論文の内容分析から世界史の教室で使用されるべき世界史の学問的方法の明らかにしようとしたり、世界史教師の PCK（Pedagogical Content Knowledge）の研究を行なっている。

③ 民主主義社会を維持・発展する市民を育成するための世界史教育

歴史的リテラシーの育成を目指したものや、世界史の内容や特殊性を踏まえたカリキュラムのほか、Facing History and ourselves（歴史と私たち自身に向き合う）（以下、FHAO と略記）は、世界史だからこそできる民主主義社会の市民の育成を図るカリキュラムとして評価できるものであることを明らかにした。

FHAO は米国の非営利組織であり、米国だけでなく国際的な活動も行っている。その主な活動内容は「生徒が歴史と彼ら自身の生活で直面する道徳的な選択の間にある不可欠な関係性を構築する」ための歴史事例によるプログラムの開発と教師への支援である。我が国における FHAO に関する先行研究は非常に少なく、人権教育や道徳教育の文脈からの分析に限られる。そこで、世界史教育という観点からの考察を行った。

FHAO は独自の学習原理や学習目標を持っている。例えば、その学習目標は、図３のように示され、市民の理解のための教育学的トライアングルを作成し（図１），知的な厳格さと感情に基づく参加、倫理的な振り返りの３つが知的な市民としての責任感を育成するものとなるという目標を掲げている。

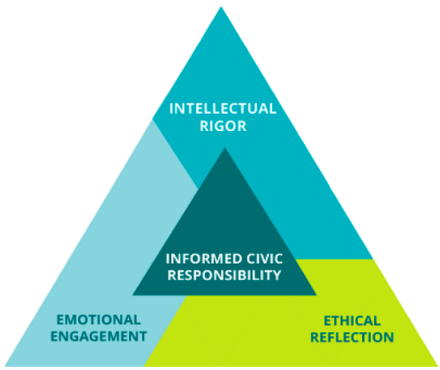

図３　FHAO の教育目標
(https://www.facinghistory.org/our-approach より)

さらに、この教育目標を可能にするための特徴的な学習原理として図４のようなスコープとシークエンスを提案している。これは、生徒の思考や判断を深めるような単元の構成方法である。その構成は，「個人と社会」、「私たちと彼ら」、「ケーススタディ」、「判断と遺産」、「参加のための選択」という５つのステップをたどるものとなっている。つまり、まず自分自身や自分と関わる他者や集団の学習を行なった上で、具体的な歴史の内容を扱う「ケーススタディ」にいたり、最終的に歴史が現在の学習へと繋がるプロセスを具体的に提示している。

FHAO が提示している「ホロコーストと人間の行動」プログラムの中の、ワイマール共和国とナチスの成長を学習する歴史の内容を

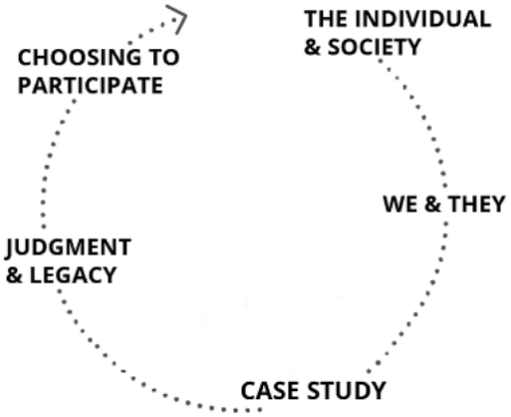

図４　FHAO の内容配列の原理

(https://www.facinghistory.org/our-approachy より)

授業例「ワイマール共和国における政治と選挙」を分析し，世界史教育としての特徴を次のように考察した。

「ワイマール共和国における政治と選挙」では、ワイマール共和国における政党に対する市民の投票行動を考えさせる学習が行われている。これは、民主主義社会における人々の投票行動を考察するための事例として機能していた。生徒は授業中の活動を通して、ナチ党が幅広い論点でドイツ人の支持を惹きつけたことを具体的な知識として獲得する。この活動は、民主主義における投票の本質的な特徴としての政党や有権者の行動に関する理解へと至ることが期待されている。

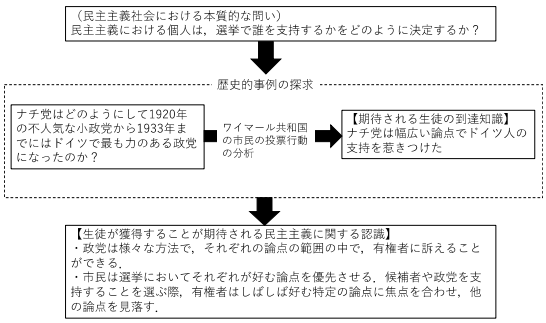

図５　FHAO の「ワイマール共和国における政治と選挙」の学習

このように，FHAO の学習は民主主義社会を維持・発展させるために、世界史を学習する。なぜ他国の過去を学ぶのか、それはこの歴史事例（ホロコーストという歴史的出来事あるいはナチ党の台頭）が民主主義社会にとっての危機的状況であるからである。現代の民主主義社会を維持・発展する社会の一員として、生徒は民主主義の危機的状況の事例を分析する。すなわち、世界史を世界史としてありのままに学ぶのではなく、現代の民主主義という観点からの世界史を学ばせるものとなっている。

民主主義社会を学習するための事例としては、自国史も選択できる。例えば、FHAO では、南北戦争後の連邦の再建についてを歴史事例として取り上げた単元が開発されている（単元「再建の時代と民主主義のもろさ」）。ここでは、アメリカにおける人種の違いが民主主義社会にとってどのような課題として存在してきたかを歴史事例の探求から生徒に考えさせる学習が行われていく。このように、世界史の場合は、民主主義一般に共通する危機や課題が学習され、自国史の場合はその国の独自の課題を踏まえた課題（黒人というマイノリティの歴史）が行われることになる。

本研究では、このように、①歴史学に基づくリテラシーの育成のための世界史、②世界史の時間的・空間的特性を踏まえたグローバルな認識の育成のための世界史、そして③民主主義社会の市民性の育成のための世界史という３つのモデルがありうることを米国の教育理論や実践の分析から明らかにした。

いずれのモデルも世界史をなぜ学ぶのかという問いに対して、①は方法的な特徴から、②は内容的な特徴から、③は目標的な特徴から、それぞれ回答することができるものであり、我が国の世界史教育の改善・改革に参考とすることができるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 空健太、民主主義社会の市民の育成を目指した世界史の授業、世界史教育研究、査読無、第 4 号、2017 年、pp.57-64
② 空健太、米国の世界史教育研究からみる世界史教育の特徴―Harris の研究に注目して―、世界史教育研究、査読無、第 3 号、2016 年、pp.115-123
③ 空健太、史料から解釈を構築する力を育成する世界史授業の構成―単元「ローマ帝国とオクタヴィアヌス」の実践を通して―、世界史教育研究、査読無、第 2 号、2015 年、pp.55-64

〔学会発表〕（計６件）

① 空健太、世界史による民主主義社会の市民育成のためのカリキュラム―Facing History and Ourselves による「ホロコーストと人間行動」の分析を通して―、第 53 回愛知県世界史教育研究会発表（愛知大学）2017 年 12 月
② 空健太、市民育成のための歴史教育―Facing History and Ourselves の場合―、第 67 回日本社会科教育学会自由研究発表（千葉大学）2017 年 9 月
③ 空健太、世界史学習論の整理と考察、第 48 回愛知県世界史教育研究会発表（愛知大学）2016 年 12 月

④ 空健太、世界史学習論の整理と考察―米国における２つのカリキュラムの比較を通して―、全国社会科教育学会第 65 回全国研究大会社会系教科教育学会第 28 回研究発表大会合同研究大会自由研究発表（兵庫教育大学）2016 年 10 月
⑤ 空健太、世界史教育における解釈学習の実践、第 27 回社会系教科教育学会・第３２回鳴門社会科教育学会自由研究発表（鳴門教育大学）2016 年２月
⑥ 空健太、目標指標から授業をデザインする世界史教育の実践―文書資料を活用した世界史教育―、第 44 回世界史教育研究会（名古屋経済大学）2015 年 12 月

〔図書〕（計２件）
① 空健太、社会形成力の育成を目指したカリキュラム、須本良夫・田中伸編著、社会科教育におけるカリキュラム・マネジメント、梓出版社、2017 年、pp.60-69
② 空健太・福井駿、学会活動における授業構想力の育成、須本良夫・田中伸編著、社会科教育におけるカリキュラム・マネジメント、梓出版社、2017 年、pp.180-186

６．研究組織
(1)研究代表者
空　健太（SORA, Kenta）
岐阜工業高等専門学校・一般科目（人文）・准教授
研究者番号：３０５４８２５２